

## しもかけ 下懸遺跡

所在地 安城市小川町  
(北緯34度54分20秒 東経137度5分43秒)

調査理由 中小河川改良事業(鹿乗川)

調査期間 平成21年11月～平成22年3月

調査面積 1,850㎡

担当者 池本正明・永井邦仁



調査地点(1/2.5万「西尾」)

**調査の経過** 調査は、愛知県建設部河川課による鹿乗川改修工事に伴う事前調査として、愛知県教育委員会を通じた委託事業である。本遺跡では平成12年度にも調査を実施しており、今年度の調査区は00A区の南側(09A・B)と西側市道部分(09C・D区)である。

**立地と環境** 下懸遺跡は鹿乗川の左岸に位置する。標高7m前後の微高地上に弥生時代後期～古代の集落が展開し、その西側に自然流路が南北にのびる。集落は弥生時代末～古墳時代初頭の遺構・遺物が最も多く、流路内からもそれに伴う木製品が多数出土している。加えて前回の調査時には、流路から古代の習書木簡が出土し、三河地域で初の成果として注目された。

**自然流路** 09A区から09C区では、北西から南東方向に向かって若干カーブする自然流路とその右岸が検出された。流路は、比較的流速のあった段階の規模は不明であるが、水流が激んで粘土や植物質が多く堆積する範囲は、幅約30mである。この粘土堆積層は大きく上下2層に分かれ、下層は褐色系の極めて植物質の多い粘土で弥生時代後期～古墳時代後期の遺物が出土し、上層は黒色系の粘土で植物質は下層に比べて減少し奈良時代～平安時代の遺物が出土する。

**流路下層** 下層から出土した土器は、弥生時代末～古墳時代初頭のもものが中心であるが量はさほど多くない。それに対して木製品は多量で、梯子や柱・板材のような建築部材や、製作途中の掘削具が出土した。それ以外には槽や杭が目立つものの、食器類は少ないようである。また種実ではクリが多く見られた。下層に関しては、古墳時代を通じて顕著な掘削が認められず、そのような状況は出土須恵器からI-17号窯期まで続いたとみられる。

**上層と木簡** 上層は、下層最上部に対して人為的な掘削がなされたものである。その幅は約5mで大溝のようでもある。この掘削は複数回なされており、09B区では大溝の合流地点が確認された。出土遺物は少ないが、上層上部からは平安時代前期とみられる須恵器甕が出土しており、概ね8～9世紀代の堆積と考えられる。また合流地点付近では木簡が出土し、「・・米物受被・・」などの文字が判読できた。木簡に共伴する土器はなかったが、上層でも底部近くで出土したことから、奈良時代木簡の可能性がきわめて高いと考えられる。

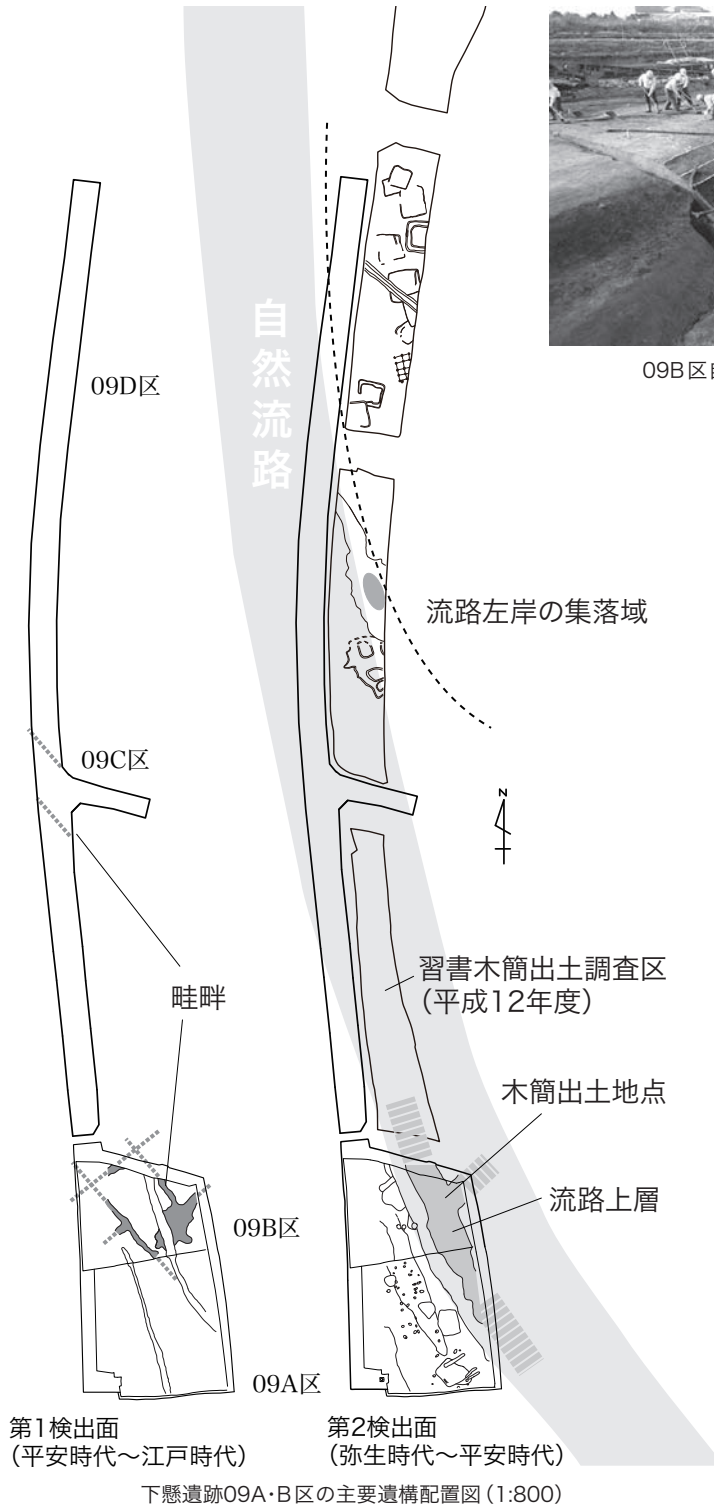
**水田畦畔** 流路は、平安時代後期には周囲の微高地と同じレベルにまで堆積が進んでほぼ埋没したようである。この上面では水田畦畔が検出され、若干の灰釉陶器が出土した。畦畔は惣作遺跡で検出されたものと同じく北西～南東方向を軸線に展開する。

**微高地上** 流路右岸の微高地上の遺構は少ない。しかし、土器や木製品のほとんどが流路の右岸近くで出土したことを考えると、集落域の一部であった可能性がある。一方左岸の微高地は09D区で確認され、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物跡や溝などが検出された。

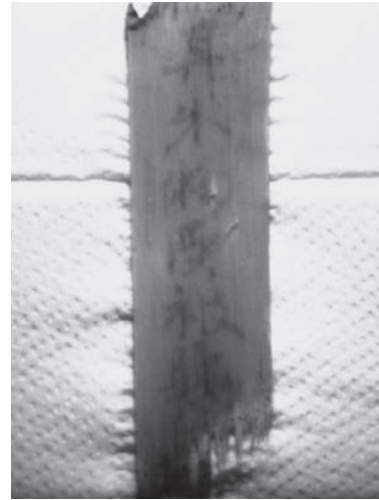
**まとめ** 今年度の調査では、流路を中心に遺跡の解明を進め、木簡出土層位を特定することができた。木簡の評価についてはさらに検討が必要であるが、習書木簡に近い地点で出土した

ことは両者が単なる流れ込み以上の意義を示していることは確かである。官衙に出入り可能な階層の集落が近隣に存在した可能性が高い。また部分的ではあったが畦畔が検出された意義も大きい。古代末期から中世前半にかけて、条里制のような統一的基準で耕作地化が進められたことを想定できよう。

(永井邦仁)



09B区自然流路上層完掘状況(南東から)



09B区自然流路出土木簡(赤外線画像)